

平成23年度

国土交通省高知西バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

## バーガ森北斜面遺跡(岩神地区)

記者発表及び現地説明会資料



日時 記者発表 平成24年1月20日(金) 午前11:00～12:00  
現地説明会 平成24年1月22日(日) 午後1:00～3:00

場所 いの町奥名の発掘調査現場

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

# I 調査の概要

## 1. 調査の目的

今回の発掘調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画している高知西バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡について事前に発掘調査を実施して遺跡の内容を記録に残し、地域の歴史復元に役立てようとするものです。

## 2. 調査対象地

高知県吾川郡いの町岩神他

## 3. 調査期間

平成23年8月1日～平成24年1月31日

## 4. 調査面積

2,400㎡

## 5. 調査体制

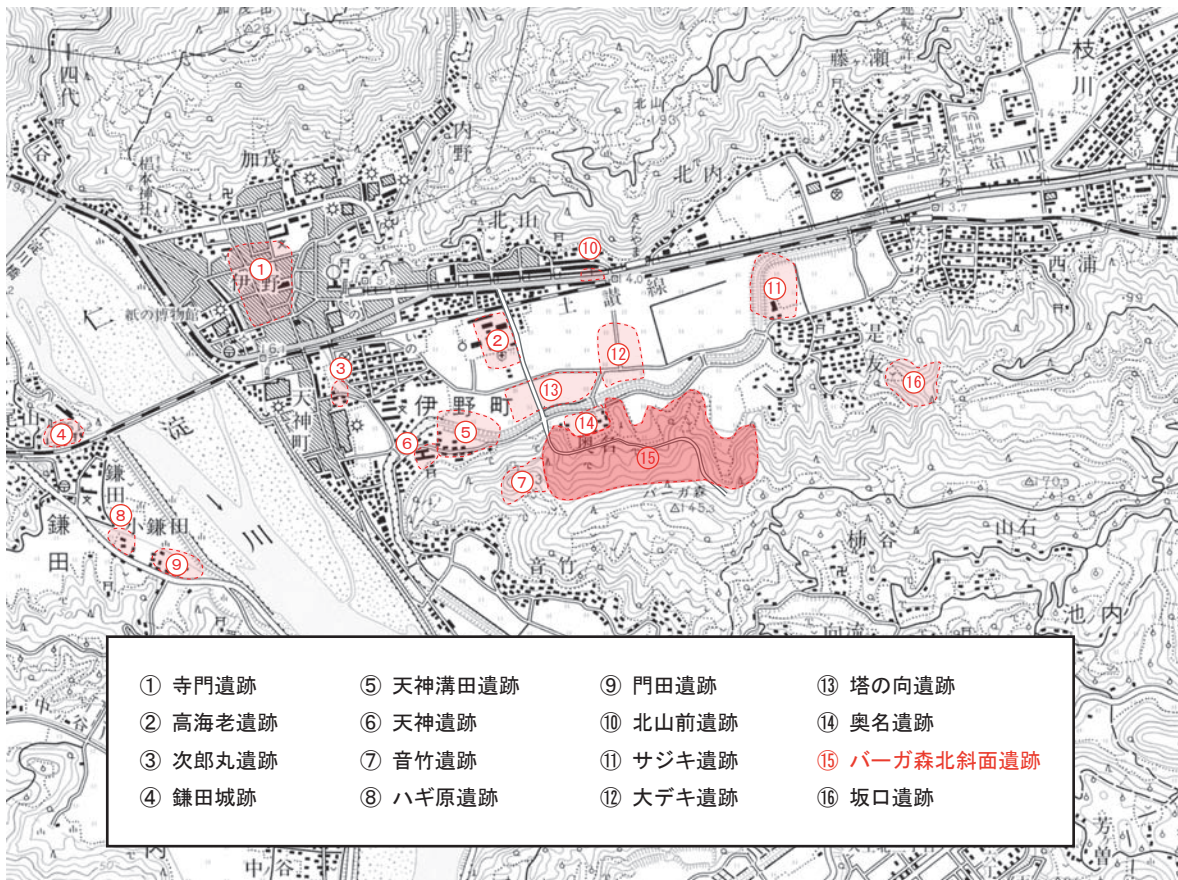
調査委託者 国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所

調査主体 高知県教育委員会

調査実施機関 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

## 6. 調査協力

国土交通省・いの町・西バイパス工事関係者・地域の方々



周辺の遺跡地図

## 7. 遺跡概要

バーガ森北斜面遺跡は、高知県吾川郡いの町奥名・是友に所在し、仁淀川の支流、宇治川に沿った標高35～80mを測る丘陵上に広がる遺跡です。当遺跡は、昭和32年(1957)に地元の方が土器を発見し、存在が明らかとなりました。昭和49年(1974)と昭和51年(1976)には、三世庵と奥名地区の発掘調査が行われ、竪穴建物跡3棟と、弥中期後半の土器や石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などが出土し、谷を挟んだ標高35～80mを測る斜面に弥生時代の集落があることが確認されました。その後、平成9年(1997)と平成11年(1999)に、いの町農道改良工事に伴い新崎地点と岩神地点の発掘調査が実施され、弥生時代中期末～後期前半の竪穴建物跡や土坑などが遺物とともに発見されています。

## II 調査の成果

昨年度のバーガ森北斜面遺跡三世庵地点の発掘調査に引き続き、今年度は、岩神地点の丘陵部を中心に発掘調査を実施しました。

### 1. 検出遺構

#### (1)弥生時代

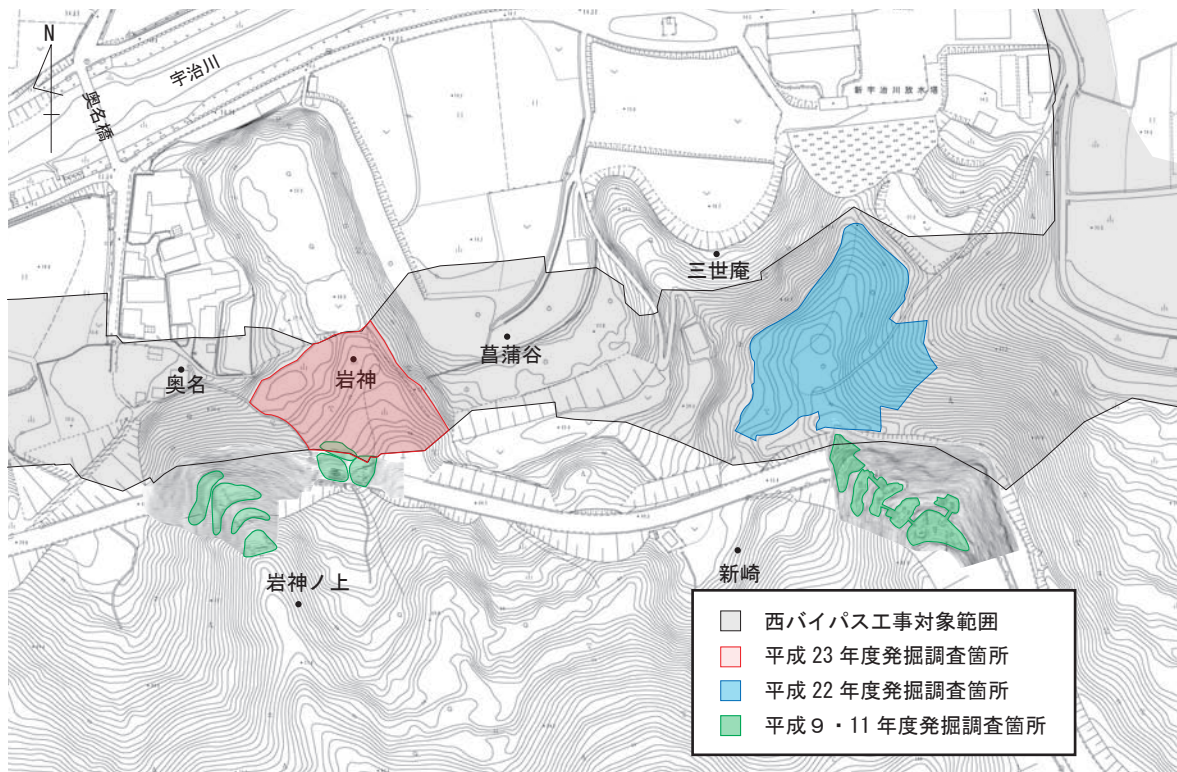
竪穴建物跡3棟、土坑、柱穴、自然流路

#### (2)古代(奈良～平安時代)

柱穴、土坑、溝、自然流路

#### (3)中世(室町時代)

柱穴、地鎮ピット(土師質土器皿を入れた柱穴)



発掘調査位置図

調査対象地の西側斜面部にある畑地で、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡、炉跡、土坑、柱穴、溝、自然流路(谷川)などが見つかりました。竪穴建物跡は、標高 30 ～ 35 m で 3 棟確認されています。建物の規模は、直径 4 ～ 5m の円形をしたものが中心ですが、Ⅱ区で見つかった竪穴建物跡(ST1)は、直径 8 m 前後を測り、今までバーガ森北斜面遺跡で発見されている竪穴建物跡の中で最大規模です。いずれの竪穴建物跡も調査区南部の谷川に接した所に立地し、山の緩斜面を削って平坦に造成しています。削った土は斜面に盛って造成していたものと思われそうですが、後世の開墾や谷川の氾濫などにより、崩れて斜面下の方に堆積していました。

## 2. 出土遺物

### (1) 弥生時代

弥生土器(壺・甕・高杯)、石器(石包丁・石斧・石鏃・叩石・砥石・投弾)、鉄器(鉄斧)

### (2) 古代(奈良～平安時代)

土師器(杯・皿・椀・甕)、須恵器(杯・皿・蓋・壺・甕)、緑釉陶器(椀)

### (3) 中世(鎌倉～室町時代)

土師質土器(杯・羽釜)、瓦器(椀)、青磁(碗)

出土遺物は、弥生時代から中世にかけての遺物が出土しています。弥生時代は、壺、甕、高杯を中心とした土器と、石包丁、叩石、石鏃、投弾、石斧などの石器が出土しています。弥生土器は、南四国独自の土器として位置づけられている一群と、中部瀬戸内の影響を受けた一群がみられます。両者とも弥生時代中期末頃の指標土器として位置づけられており、当時の活発な交流を窺い知ることができます。石器には稲の穂摘具と考えられている石包丁と、狩猟、武器としての石鏃、木の伐採に使う石斧などの道具があります。また、当遺跡では、鉄斧が比較的多く出土しており、県内の弥生時代中期末～後期初頭の遺跡としては、鉄器を多用した集団の集落跡であるともいえます。

## Ⅲ まとめ

今回の調査で特筆すべき点は、岩神地点で見つかった竪穴建物跡が、直径が 8 m もある大型の建物跡であるという点です。これは、今までバーガ森北斜面遺跡のなかで見つかった竪穴建物跡のなかでも最大規模であり、集落の中心的な建物である可能性があります。さらに、この竪穴建物跡に隣接して、長さ 1.8m、幅 1.2m の長方形の土坑が見つかり、中から弥生土器の壺と一緒に炭化した米と、堅果類(ドングリ)が出土しました。出土状況から貯蔵穴と考えられ、竪穴建物跡などの居住施設と併せて発見される例は極めて少なく、貴重な発見となりました。これまで丘陵や斜面にある「高地性集落」は、その立地や、出土遺物の内容から軍事的な性格をもつ集落と考えられてきました。しかし、今回の発見により「山住み」の集落としての側面が見えてきました。全国的に集落の数が増え、その規模も拡大する弥生時代中期末(B.C.1 世紀頃)の暮らしぶりをより具体的に窺い知ることができる貴重な成果が得られたといえます。

もうひとつの成果は、古代(奈良～平安時代)の遺構と遺物が山の上で発見された事です。県内の調査事例では、平野に展開する古代の官衙や郡衙関連施設、寺院などは資料的には恵まれています。一般的な集落の実態についてはまだまだ解明されていない点が多く、今回の事例の様に丘陵部に展開する集落の実態や、山野開拓の歴史を見て行く上で重要な資料となりました。



遺構配置図



大型竪穴建物跡（Ⅱ区 ST1，北より）



貯蔵穴（Ⅱ区 SK1，西より）



弥生土器壺（Ⅱ区 ST1 出土）



石包丁（Ⅱ区 SR1 出土）



鉄斧（Ⅱ区 SR1 出土）